

神様が守ってくれた金作原

龍郷町立田小学校 四年 姫野 楓雅

今から千年以上も昔。数ある山の中でも、新緑のころにはあざやかな緑がまぶしく、夏の暑い日には空の青さと南風でゆれる緑の葉に元気をもらい、様々な鳥の鳴き声が村人たちの心を和ませてくれる山があった。村人たちはその山に入り、いのししやヤギをつかまえたり、山菜や木の実をとったりして食料を調達していた。その日その日の食料をありがたくいただいて帰って行くのだった。

ところがいつのころからかー。

「わっはっは。今日もうまそうないのししを仕とめたぞ。

これで十日連続じゃ。」

村の男たちは、まだ食料が残っているのに、競い合っているのししやヤギをとらえることに夢中になった。女たちもそう。人よりも多くもつともつという欲が出て、必要以上の食料をとっていた。しだいにその山の動物たちは消え、山菜や木の実も少なくなり、生を感じない山となくなってしまった。それでも村人たちは相変わらず山の中をあらし回っていた。

ある日、一匹の黒いハブが長い眠りから目を覚ました。

暗い穴からおいしい空気を求めて久しぶりに出た世界。ハブの目に飛びこんできたのは、今まで見たことがない色の世界だった。いや、色のない世界、命を感じない世界と言ったほうがいいかもしれない。

「一体どういうこと。何が起きたの。こんな景色、見たことないわ。」

ハブがぼう然としていると、

「こらあ。待て待て。もうにげられないぞ。うわっはっはっ。」

と大きな笑い声が近づいてきた。その前を一匹のいのししがハブ目がけて泣きながら必死に走ってくる。

「助けて、助けてえ。」

そう言っつて、ハブの後ろにかくれた。追いかけてきた男は、

「いのししもお前もいっしょに仕とめてやる。うわっはっはっはっ。かくごしな。」

そう言っつて、近づいてきた。

「待っつてください。私の体のうろこを一つ差し上げます。これでかんべんしてください。そのうろこを持って帰り、願いをかけると、きつといいことがあります。」

ハブは、自分の体からうろこを一枚はがし、男にわたした。

「ちっ、しょうがねえ。何もいいことがなかったらしょ

うちしねえからな。」

その日、村は大きわぎになった。あの男が持ち帰ったうろこが、大きなブタに変身したからだ。村人たちはその話を聞き、おれも、私も、と山へ行つては、ハブからうろこをもらつて帰るのだった。それはそれはもう、お祭りのようなさわぎだった。でも、うろこを一枚ずつわたしていったハブの体は、はだがむき出しになり、歩くたびにきずだらけになった。とうとう最後の一枚になったとき、

「この一枚がなくなったら、私の命はもう終わるわね、きつと。でも、大好きなこの山が守られるのなら、それでもいいわ。」

ハブは、悲しくつぶやいた。

しばらくすると、カサカサツと音が聞こえた。ふり向くと、そこに立っていたのは見事な白ひげのおじいさんだった。

「わしにもそのうろこを一枚くれないか。」

「いいですよ、おじいさん。願いがかなうといいですね。」

ハブは、残った一枚のうろこを、悲しそうだけど、どこかおだやかな表情で体からはがしおじいさんにわたした。

「では、わしも願いをかけさせてもらおう。」

そう言っておじいさんは目を閉じ、何かつぶやき始めた。すると、見る見るうちに、山は色づき始め、鳥の鳴き声であふれ、動物たちの行き交う姿がハブの目の前に現れた。村人たちも山の変化に気付き、急いで山に上った。待っていたのは、白ひげのおじいさんと、はだがむき出しになって、見るのもいたいたしいハブ。すると、とつ然ハブの体が金色に輝き出した。光はどんどん大きくなり、山全体を包みこんだ。村人たちは、あまりのまぶしさにぎゅっと目をとじた。しばらくして、そつと目を開けると、そこには金色に輝くそれはそれは美しいハブがいた。おじいさんは、金色になったハブをやさしいまなざしで見つめ、

「ほう、見事な色だ。お前の心の色じゃ。お前はこの山を守ってくれた神様じゃよ。」

そう言つて、やさしくなでた。村人たちは、山全体にあふれる命を感じながら、金色のハブの神々しさに言葉を失った。

「山には神様が住んでいて聞いていたが本当だったな。その神様を、自分たちの欲深さで失うところだったよ。目が覚めた。」

山を下りながらだれかがつぶやいた。みんなも心の中で同じことを思っていた。

千年以上たった今も、「金作原」と言われるおく深い

山には、あの金ハブの子孫が住み、代々、山の命を守り
続けているらしい。

